平成 25 年度福島県

大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業　報告書

清泉女子大学
福が一る

浅野汐香　石田絵美　小山田香菜

松田江里菜　牛山結衣　高澤優

目次

1．はじめに

２．地域概要

３．集落実態調査内容

（１）夏の視察

（２）秋の視察

４．調査結果

（１）視察調査より得られた結果とまとめ

（２）全国地域おこし協力隊事例の検討

５．考察

６．貝泊集落地域活性化案

７．おわりに

（巻末資料）

資料１：貝泊集落に関するデータ

資料２：イベント企画案

資料３：平成 26 年 2 月 1 日発表時のパワーポイント資料

１．はじめに

清泉女子大学福がーる（以下、「福がーる」と略）は、東京都品川区にある清泉女子大学地球市民学科に在籍する学生６名（2 年生４名、3 年生２名）により構成されている。

平成 25 年 5 月、学科教職員の呼びかけで「大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業」（以下、「集落調査事業」と略）の存在を知った。また、その際、地球市民学科内には福島県出身者が 3 名おり、皆が同じように、東日本大震災以降「（地元である福島に対して）何かしてみたい！」と考えている仲間であるということがわかった。そうしたことが契機となり、福島県出身者を中心とするメンバー6 名が集まり活動するに至った。

今回、ご縁があり福島県いわき市田人町貝泊集落で活動することになった。本報告書は、平成 25 年度 2 回に及ぶ福がーるの現地調査の内容とその成果を記したものである。

2.　地域概要

まず、福が一るが調査を行った、福島県いわき市田人町にある貝泊地区について概要を述べる（巻末「資料１」データを参照のこと）。

貝泊集落は福島県いわき市の田人町の中にある（図１）。田人町は中通りと茨城県に面した南西部の地域であり、6 つの地域（旅人、石住、南大平、黒田、荷路夫、貝泊）から構成されている。その内、ひとつが貝泊集落である。また、貝泊地区内でも、貝泊・戸草・井出の 3 つの集落に分かれている。集落全体が山の中にある。

図１　いわき市田人町の位置

出典：いわき市ホームページより

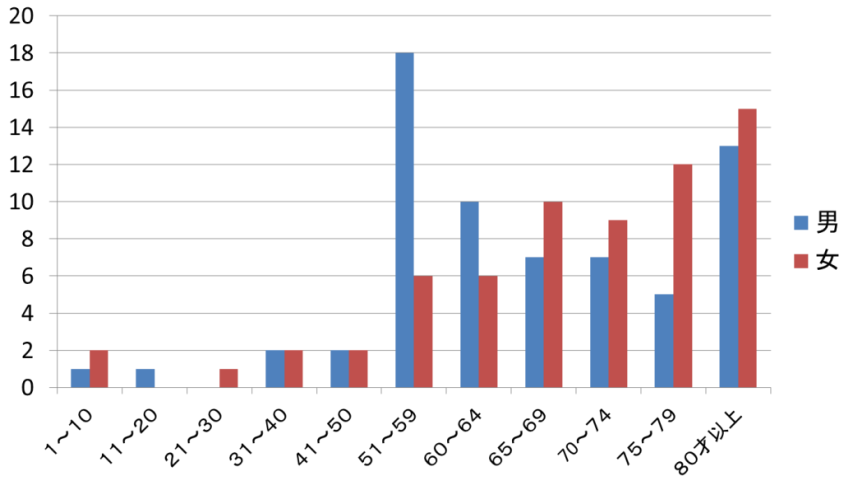
集落の面積は 39. 75 平方キロメートル、農地面積は１. 98 平方キロメートルである。現在は、農地面積の 3 分の 1 が耕作放棄地となっている。

集落の人口は平成 7 年には 237 名（世帯数 82）、平成 12 年では 186 名（世帯数 72）、平成 17 年では 165 名（世帯数 64）、平成 22 年では 162 名（世帯数 71）と確実に減少してきており、平成 25 年 7 月現在では人口が 131 名（世帯数 61）となった。

そのうち 65 歳以上が 78 名であり、総人口の約 6 割を 65 歳以上の高齢者が占めている（図 2）

平成 14 年から、人口減少を問題視した貝泊集落の住民有志により「貝泊コイコイ倶楽部」が発足、移住者を積極的に受け入れる活動をおこなってきた。その結果、人口増加とはならなかったものの県域を超えて貝泊集落へ移住者が増加することとなった。しかし平成 24 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生し、Ｉターン住民の転出が増加した。現状、23 名（7 世帯）が避難をし、他の地域に移り住んでいる。

図２　貝泊集落の年齢別グラフ



住民組織「貝泊コイコイ倶楽部」は、地元の小中学校の存続と地域の活性化を目的として活動を行っている。Ｉターン者受入れ活動以外にも、HP による貝泊集落の情報発信、「山ぼうしの家」での直売所販売や加工場による食事の提供、県との協働事業「桜の公園」（貝泊集落内）の 500 名におよぶオーナー確保や公園内整備、「稲作体験」交流体験者の受け入れなど、毎年積極的に地域活動を行っている。

３． 集落実態調査内容

福が一るは、いわき市田人町貝泊集落に、平成 25 年夏（8 月）と秋（11 月）の２回に渡り調査を実施した。年間スケジュールは以下の通りである。

この章では、貝泊集落をメンバー全員で訪問し視察を行った 2 回の調査について、内容を記載していく。

(1) 事前調査（平成 25 年 8 月 11 日）
　集落代表者、いわき市田人町役場職員、コイコイ倶楽部役員と面談
(2) 事前勉強会開催（平成 25 年 8 月 27 日）
(3) 夏の現地視察実施（平成 25 年 8 月 29 日～30 日）
(4) 集落勉強会実施（9 月 24～11 月 15 日まで計 7 回）
(5) 秋の現地視察実施（平成 25 年 11 月 17 日）
(6) 集落勉強会、提案内容審議
（平成 25 年 12 月 3 日～平成 26 年 1 月 15 日まで計 6 回）
(7) 調査報告会（平成 26 年 2 月 1 日）
(8) 調査報告書のまとめ

（1）夏の現地視察（2013 年 8 月 29 日～30 日）

夏の現地視察では、主に２つのことに重点を置いた。一つ目は、ヒアリング調査、二つ目はフィールドワーク調査（自分たちの足で歩いて情報を得ること）である。

まずヒアリング調査は、主に 1 日目に実施した。住民の方たちがどのような生活をしているのか、何が問題だと思っているのか、について耳を傾け理解するため、メンバー 8 名（鈴木教授、横山助手含む）を 3 地区に分配し、各地域住民からの話が聴けるように設定した。また、夜には、住民の方々との意見交換の場として BBQ が行われたため、その際にもいろんな方のお話しを伺い、なるべく情報を得ることとした。

次にフィールドワーク調査は、2 日間を通して実施した。貝泊集落は広大な土地を有しているため、歩いて移動することが困難な場合も多く、コイコイ倶楽部の皆さんにサポートして頂く機会も多かったが、自分たちで移動できるところはなるべく歩くことを心掛け、集落内で感じたことをメンバー間で共有することとした。

8/29（木）スケジュール

時間	内容	場所、その他
8：00	（先生、浅野、横山）集合	ニッポンレンタカー五反田支店
8：15	学生全員集合	ニッポンレンタカー五反田支店
8：20-11：00	移動	
11：10-11：40	昼食	レストラン「ほうき星」
12：00-13：15	地区概要説明会	貝泊集会場
13：15-13：45	宿泊荷物置き等	星の森コテージ
13：45-14：30	地区内視察	（車１台で移動）
14：30-18：00	フィールドワーク（ヒアリング調査）	3 班にわかれて、ＦＷ実施を実施した。 貝泊集落…2 名（高澤、牛山） 戸草集落…3 名（鈴木、小山田、石田） 井出集落…3 名（浅野、松田、横山） ※移動は「コイコイ倶楽部」の車にて。
18：15-20：00	地域の方との交流会 【バーベキュー】	星の森コテージ

8/30（金）スケジュール

時間	内容	場所、その他
-8：00 まで	荷物の片づけ等	星の森コテージ
8：00	朝食（自炊）	ご飯、おかず、スープ＠星の森コテージ
8：45-9：20	移動	現地視察
9：20-12：00	フィールドワーク	貝泊集会所

	ふりかえり	
12：00-14：00	（昼食を取りながら） 地域の方を交えての意見交換会	貝泊集会所 ※食事を取りながら、地域の方との交流会を実施
14：00-14：30	移動（貝泊内）	現地視察
14：30-18：30	移動	
19：00 ごろ	解散	ニッポンレンタカー五反田支店

＜ヒアリング調査時の様子やご協力頂いた住民の方＞

＜バーベキュー時の様子＞

＜フィールドワーク時＞

＜意見交換会＞

（２）秋の視察（2013 年 11 月 17 日）

夏の視察を終え、貝泊集落に関する勉強会、意見交換会を重ねるにつれ、貝泊集落を観光地として活性化させてはどうか、との案が出た。具体的には、都会から若い世代（主に大学生）を連れてきて、貝泊集落の魅力を存分に楽しんでもらえるような１泊２日のイベント企画を実施できないか（「資料２」を参照）、それをすることにより、集落のＰＲ活動になるのではないか、というものである。そのため秋の視察では、宿泊施設の下見や観光のプログラムを組むにあたっての場所の精査のため、貝泊集落（一部集落以外含む）を視察した。

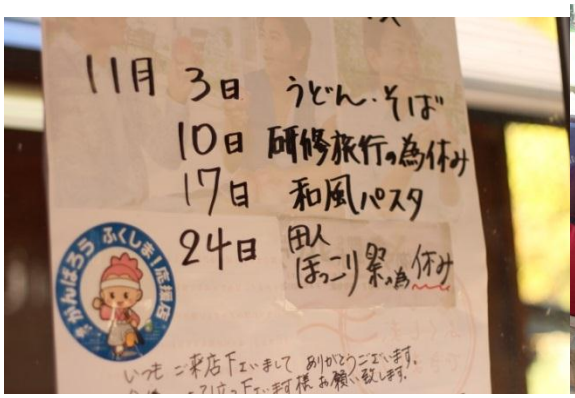
11/17（土）スケジュール

時間	内容	場所、その他
7：00	集合	東京駅八重洲口
7：15	バス乗車	東京駅八重洲口周辺
7：20-11：00	移動	バス下車後に区長（芳賀）さんの車に乗車
11：00-11：30	視察	おふくろの宿訪問
11：30-12：30	とうふ作り体験	山ぼうしの家とうふ工房
12：30-13：30	昼食	山ぼうしの家
13：30-15：00	地区内視察	（車１台で移動）
16：00-20：00	バスで移動	東京へ帰省

＜宿の視察＞

＜豆腐作りを見学＆体験＞

＜その他視察風景＞



４． 調査結果

（１） 視察調査より得られた結果とまとめ

合計 2 回実施した視察により得られた情報を分野ごとに記載し、その後に「まとめ」を記載する。

Ｉ．分野ごとの調査結果

現在の生活（交通・買い物・仕事・病院）について

・移動については、車を利用できるので、あまり不便に感じていない。買い物は植田（車で 10 分程度）まで行けばできるので不便はない。不便なのは病院である。貝泊集落の中には病院がないため、病院ですぐに診察してもらうことができないためだ。（70 歳代・男性）

・ずっと昔から農業をしている。現在は６、７月に咲くカラーという花を育てて、東京の市場へ出荷し、6 ヘクタール分の田んぼをつくっている。タバコをつくり、牛を 40 頭ほど飼っていた時期もあった。現在は次男が後を継いでいて一緒に作業をしている。生活について特に気になっていることはない。（80 歳代・男性）

・田んぼと野菜、カラーという花をつくっている。農業をするにあたり機械がかかせないが、新品は高くて買えないのがネックである。中古の機械を購入し、なるべく自分で整備して使用している。（70 歳代・男性）

・車の運転ができなければ終わり！という。車は住民の唯一の足である。週に 1 度、車で食材の買い物に出かける。野菜などは自分で作るため、肉や魚を主に買いに行く。また、なかなか田人のような山地まで介護サービスの手が届かないため、山地と市街地との介護サービスの差について今後のことを心配していた。元気の秘訣は、月に一回の老人会で健康体操をしたり、みんなでおしゃべりしたりすることだと言っていた。（80 歳代・女性）

・楽しみは月に 1、2 回開催される老人会である。この老人会はコイコイ倶楽部の活動よりも、貝泊地区全員の参加率が高いと言っていた。貝泊地区は上・中・下区とさらに分けられ、それぞれに集会所がある。人を絡む交通事故は滅多にない。（交通事故があったとしても、どこかに車をぶつける程度で人身事故はない。）（80 歳代・女性）

・寒い冬の時期に雪が積もれば、行政が除雪作業をおこなってくれるため苦労はしない。（県道 15 ㎝以上・市道 20 ㎝以上。そもそもあまり雪が積もることはない。）（70 歳代・男性）

・高齢一人世帯の一人が亡くなったが、それに隣家が気付いたのは 3 日後だった。（70 歳代・男性）

・買い物など移動する際車がないと不便なため、旦那さんは車の運転ができる。（60 歳

代・女性）

・買い物は植田町でしている、近くに住んでいる娘さんが連れて行ってくれる。（80 歳代・女性）

・病院も植田町にあるが、田人町に診療所があり、貝泊で年に 1 回健康診断を受けられるようになっているのでさほど困ってはいない。しかし、救急車は呼んでも来るまでに 30 分程度かかる。（70 歳代・男性）

・朝は 5 時に起き、夜の 11 時には就寝している。買い物へ行く際は夫が運転し、車で 10 分の植田町まで行く。（妻は運転免許証を持っていない。貝泊地区の 70 代で運転できる女性は 2 名のみ。男性のほとんどは運転ができる。）（70 歳代・男性）

・勿来（なこそ）に大きな病院があり、救急車は 30 分程度で着く。田人町に大きな病院はない。田人診療所がわりと近いところにあるため、医療に対して特に不満はない。

・「ぼうしの家」で実施している直売所（毎週日曜日にレストランと農産物、小物販売を実施）に参加していたが、足腰を悪くしてからは診療所に通うようになり、山ぼうしの家の手伝いができていない。（80 歳代・女性）

・買い物は、週に 1 度決まった曜日に魚や肉、野菜などの販売が来る。月に２、３回はヤクルトなどの販売もあるという。また、決まったものしか手に入らないため、それ以外で必要となるものは息子たちが近隣のスーパーマーケットで買ってきてくれる。病院も近くにはないが診療所から迎えが来る。（80 歳代・女性）

・貝泊の近くの勿来に住んでいる息子さんが迎えに来て週１、２回のペースで病院に連れて行ってもらっている。（80 歳代・女性）

・19 歳で鮫川村から貝泊へ嫁いで以来 63 年間貝泊に住んでいる（現在 82 歳）。貝泊に来てからは、木を切って炭炊きをしたりチップづくりをしたりといった山仕事をはじめとして、タバコや蚕を育てたり、牛を飼っていた時期を経て稲作を行うようになった。自分が若いときは、貝泊集落にも人が多かった。現在、井出は 19 世帯だが、開拓当時は 33 世帯あった。今は月に一度の老人会でのイベントを楽しみにしている。集会所で体操をし、男女 20～30 人(女性がほとんど)でお弁当を食べるのが楽しい。（80 歳代・女性）

・集落での生活で困っていることは特にない。昔に比べたら今の生活は幸せだと話していた。（80 歳代・女性）

昔の生活について

・昔から農業に従事している。すいとんやこんにゃくなどを生産していたこともある。昔は養蚕もさかんで、貝泊には養蚕の小屋や棚など自分で作成し生産していた家も多かった。林業も盛んで山仕事をしていた時期も長い。ただ山仕事をしながらも、農業は続けており、午前は山仕事、午後は農業をするなどの生活をしていた。（80 歳代・男性）

・不便ながらも活気があり皆元気だった。学校に子供があふれていたときは賑やかで、お祭りでお神輿を担いだりしていた時もあった。林業が盛んで、30 年前は山の材木も高く取引できたのに対し、今では当時の７～８分の１程度にまで価値が下がってしまった。そのため働く場所もなくなってしまい、若者の山離れ、貝泊離れが進んだ。（80 歳代・男性）

家族について

・二番目の娘さん夫婦が来てくれるという。貝泊は良いところだから戻ってきたいと娘さんはお話しされているらしい。（80 歳代・女性）
・年老いたら、田舎でスローライフを送るのがいいと言われているが、ここは病院が遠いために、年老いたら町へでるべき。農家は、新鮮な野菜が食べられるので都会の人のことを考えると大変贅沢である。（80 歳代・男性）
・自分の子供が近くにいないため、ある程度気を張って生活していることも、元気の秘訣なのではないか。（80 歳代・女性）
・農作業を息子が毎日来て手伝ってくれているので助かっている。（70 歳代・男性）
・息子が 2 人いる。現在は息子の一人と生活しているが、その息子は貝泊以外で会社員として働いているため帰りがいつも夜の 7 時、8 時くらいだという。夜は息子がいてくれるし、日中は同じ集落内に住む住人たちを家に呼んだり、自分が行ったり、お互いの家を行き来し合う関係なので孤独を感じることはない。（80 歳代・女性）
・生まれた時からずっと貝泊に住んでいるため、今の生活に特に困っていることはない。幸せだ、と言っていた。（80 歳代・女性）
・子供は 3 人おり、内 2 人は東京に住んでいる。もう一人は車で 1 時間ほどのいわき市内に住んでいて、週末はよく家に遊びにくる。（70 歳代・男性）
・自分は 7 人兄弟の次男。自宅が親の代から農家であった。長男が横浜へでたために自分が実家を継ぐこととなった。子どもはみんな貝泊の近くに住んでいる。（80 歳代・男性）
・長男・次男がいるが、2 人とも「泉町」（「した」という）に職場がある。それぞれ結婚していて、家も泉町（した）にある。息子さんたちは離れて生活はしているものの、貝泊地区の消防団に所属している。（70 歳代・男性）
・昭和 5 年から 83 年間貝泊集落に住んでいる。9 人兄弟だが、2 人亡くなって他 6 人は東京に住んでいる。妻はいわき市内から嫁いできた。子どもは長女、次女、長男で、長女は植田、次女は泉、長男は勿来に住んでいる。3 人共結婚しており、1 週間に 1 回は家に来てくれる。（80 歳代・男性）
・娘さんが 3 人いらっしゃる。全員が県内に住んでいる。（70 歳代・男性）

Iターン者受け入れについて

・Iターンの人は慣れるまで暮らしが大変。集落は全員顔なじみで誰がどこに住んでいるか把握している。なかなか溶け込むことができなかったり、自分が理想としていたスローライフとは異なっていたりするからである。（70 歳代・男性）

・うまくいかず逃げ帰ってしまう人もいるので、Iターンの受け入れは問題点がいくつかある。（70 歳代・男性）

・田舎での生活をしたことのある人はいいかもしれないが、全く経験のしたことない都会育ちの人のとっては厳しいのではないか。（70 歳代・男性）

・自分たちとは違う人たちという認識がある。（80 歳代・女性）

・Iターン者歓迎であるが、住む所や資金、人間関係などの問題があることから、居住するには簡単にはいかない。　（80 歳代・女性）

・I ターン者は価値観が違うと感じる人もいる。（土地は余っているため、土地を売ったり、家を借りるのも金銭的には安いが、そもそも家の持ち主が転入者に家屋をかしてくれないケースもある。）（70 歳代・男性）

・定住人口を増やしたい（Iターン者を積極的に受け入れたい）と考える貝泊地区のコイコイ倶楽部は集落の住民ほとんどが加入しているにも関わらず、個人となると、そういった家を貸したくない、といった考えも伺えた。（50 歳代・男性）

震災について

・この地域では、震度６の地震が起きた。（50 歳代・男性）

・福島原発の放射能問題後、貝泊は比較的放射能が低いのに、Iターンで貝泊に移住した人々は親戚を頼りに出て行ってしまった。子どもがいる家庭は特に敏感だろう。（70 歳代・男性）

・原発の影響で子どもが心配だからという理由で出て行ってしまった人はいる。（80 歳代・女性）

・東日本大震災以前、避難場所は決められていなかったが、震災後は区長宅が避難場所となった。（50 歳代・女性）

・貝泊地区のハザードマップ[1]は作成されていない。

---

1. ハザードマップとは、自然災害による被害を予測し、その被害範囲を地図化したもの。予測される災害の発生地点、被害の拡大範囲および被害程度、さらには避難経路、避難場所などの情報が既存の地図上に図示されている。ハザードマップを利用することにより、災害発生時に住民などは迅速・的確に避難を行うことができ、また二次災害発生予想箇所を避けることができるため、災害による被害の低減にあたり非常に有効である。（広辞苑より引用）

教育について

・息子さんが小学生のころ、戸草の小学校に通っていた。上の学年のお兄さんがおぶって行ってくれた。（80 歳代・女性）

・娘さんや息子さんは中学校までは貝泊近くで通えていたが、高校は町の方にでるようになり、大学は東京に上京した。昔は学校もとても賑やかで 70 人程度は学生がいた。（80 歳代・女性）

・貝泊の学校は去年耐震工事に 1 億もの予算を投じたが、残念ながら来年は休校である。（50 歳代・男性）

自然について

・いつもあるものだから、気にしてみたことがない。（80 歳代・男性）

・水はおいしいとよくいわれている。（70 歳代・男性）

・星が綺麗である。（50 歳代・男性）

・名水が自慢である。（70 歳代・男性）

・「星の森コテージ」は数年前に改築され、外部の利用者を積極的に受け入れている。（70 歳代・男性）

・花の種類が多く、植物で四季を感じることができる。（70 歳代・男性）

Ⅱ．まとめ

① 移動手段は主に自動車である。

② 買い物は、移動スーパーを利用する場合、自分の（成人した）子供たちに任せている場合、子供たちの車を利用して近隣にあるスーパーへ行く場合があった。

③ 仕事は農業、林業に従事していた方がほとんどであった

④ 生活の中の楽しみは、月に 1 回の老人会である場合が多い。

⑤ 医療に関しては、貝泊集落近辺にある診療所に通っている。

⑥ 救急車にのった場合は、近隣の病院まで 30 分程度かかる。

⑦ 子供については、同居している場合、近隣に住んでいる場合、県外に住んでいる場合があるが、ヒアリングを行ったほとんどの家庭が、子供のうち 1 名はいわき市内（主に植田町、泉町）に住み、いつでも行き来できる関係を保っていた。

⑧ 林業や農業の衰退により、貝泊集落内での働き口がほとんどなくなってしまったことによって貝泊集落離れ（それによる高齢化率の上昇）が進んでいる。

⑨ 新しく入ってくる I ターン者については、多様な意見があり「自分たちとは違う」と感じている住民もいる。

⑩ 過疎化については、特に問題意識をもっていない。

（2） 全国地域おこし協力隊事例の検討

福がーるが所属する地球市民学科では、学科にゆかりのある茨城県常陸太田市で「地域おこし協力隊」[2]制度を利用し、学科の卒業生が地域に入り住民の方と暮らしながら地域活性化支援の活動を行っている。福がーるは、先輩方の活動内容をプレゼンテーションして頂く機会を得て、各地域の地域おこし協力隊の事例を調べることによって、貝泊集落の地域活性化のヒントを得ることができるのではないか、と考えた。以下は、事例の収集の結果と分析である。

---

2. 総務省地域力創造グループ地域自立応援課が推進する地域力創造プランの一つ。詳しくは、総務省の「地域おこし協力隊」ホームページ
https://www.iju-join.jp/chiikiokoshi/index.html を参照のこと。

Ⅰ．全国 44 地域で活動する地域おこし協力隊事例の収集結果と分析

以下は、地域おこし協力隊 HP や、地域おこし協力隊に関する書籍、雑誌等から情報収集を行った。

地域	事例	貝泊集落に当てはまるか	活動カテゴリー
No.1 新潟県十日町市	・地域おこし協力隊の募集	○	・地域づくり
No.2 滋賀県高島市	・アートで人と町をつなぐ ・地域の教科書づくり	○	・観光 ・地域づくり
No.3 愛知県豊根村	・山村留学 ・ブログ、サイトの運営	○	・教育 ・情報通信
No.4,5 やまなし農業協力隊シンポジウム	・就農のための活動（ジャム、ぶどう、豆腐づくり）	○	・農林水産・産業
No.6 三重県熊野市育生町	・特産品開発 ・ハイキングコース整備	○	・農林水産・産業 ・観光
No.7 富山県立山町	・SNS 通信 ・敬老会の参加	△ ○	・情報通信 ・地域づくり
No.8 島根県美郷町別府地域	・協力隊による高齢者支援	×	・地域づくり
No.9 新潟県十日町市	・地域物産直売所	○	・農林水産・産業
No.10 埼玉県秩父市	・ブログの運営	○	・情報通信
No.11 宮崎県日之影町	・FW 企画	○	・観光
No.12 高知県本山町	・SNS による情報発信	○	・情報通信
No.13 秋田県上小阿仁村	・ブログ、広報による情報発信	○	・情報通信
No.14 和歌山県紀美野町	・I ターン希望者の支援 ・ホームページの作成	○ ○	・観光 ・情報通信

No.15 山梨県都留市	・地産地消のオーガニックカフェ	○	・農林水産・産業
No.16 北海道利尻町	・ホームページ、広報誌の作成	○	・情報通信
No.17 鹿児島県西之表市	・かつての特産品を再び栽培	○	・農林水産・産業
No.18 徳島県勝浦郡勝浦町	・道の駅で特産品を販売	△	・農林水産・産業
No.19 岡山県美作市	・耕作放棄地の再生	○	・環境
No.20 福島県伊達市	・地域の伝統・風習の発信	×	・地域づくり
No.21 高知県仁淀川町	・山村留学	○	・教育
No.22 秋田県大館市	・温泉発掘 ・そばの栽培	×	・環境 ・農林水産・産業
No.23 「市町村の課題」戦略セミナー	・ワークショップ（主催：総務省・市町村アカデミー）	◎	・地域づくり
No.24 山形県朝日町	・着ぐるみ ・お土産の開発	△	・観光 ・観光
No.25 長野県下高井郡木島平村	・集落の出来事をまとめたニュースレター	○	・情報通信
No.26 大分県竹田市	・ブログでの情報発信 ・フリーマガジン	○	・情報通信 ・情報通信
No.27 静岡県松崎町	・棚田の保全 ・地元住民の地域学習 ・蛍の観察 ・新米の料理体験 ・農業体験プログラム ・田舎暮らし応援ツアー	× ○ × × △ ○	・環境 ・地域づくり ・観光 ・観光 ・観光 ・観光
No.28 島根県雲南市大東町	・イノシシ料理	◎	・農林水産・産業
No.29 栃木県日光市栗山	・ホームページの立ち上げ	○	・情報通信
No.30	・ネット情報発信	○	・情報通信

北海道白糠町			
No.31 山形県鮭川村	・広報誌作成 ・観光協会のサイト ・伝統行事の取材 ・在来野菜の発掘 ・昔ながらのお米作り	◎ △ × ○ △	・情報通信 ・情報通信 ・その他 ・農林水産・産業 ・地域づくり
No.32 三重県熊野市	・移住交流企画 ・特産品企画	△	・観光 ・農林水産・産業
No.33 茨城県常陸太田市里美	・若者、年配の交流会 ・都会と地方の交流会 ・里見の日（コーヒー）	△	・地域づくり ・地域づくり ・観光
No.34 高知県長岡郡本山町	・山岳観光	○	・観光
No.35 北海道ニセコ町	・米粉のシフォンケーキ	×	・農林水産・産業
No.36 岡山県美作市梶並	・山村シェアハウス ・山村ワーキングホリデー	◎	・その他 ・観光
No.37 岩手県気仙郡住田町	・復興応援 ・廃校を使用し住民との交流	○	・地域づくり ・地域づくり
No.38 山口県周防大島町	・ホームページ作成 ・地域の作物・伝統を生かした料理体験 ・里山再生	○	・情報通信 ・観光 ・環境
No.39 鳥取県八頭町	・特産物を発掘する ・オリジナルの販路を築く	○	・農林水産・産業 ・農林水産・産業
No.40 長野県木曽町	・地域おこし協力隊	×	・地域づくり
No.41 徳島県三好市	・古民家、空き家を利用した 音楽イベント	×	・地域づくり
No.42 北海道中頓別町	・自然学校	△	・観光
No.43 山梨県甲州市	・耕作放棄地の雑草を資源にし、商品開発⇒野菜・ハーブティー	◎	・教育

	・週に１回の野草料理教室。 ・朝市、フリーマーケット		
No.44 広島県三次市	・出身者向けの SNS ・地域の雑学本（地域の魅力など）	△	・環境 ・農林水産・産業

参考：地域おこし協力隊 HPhttp://www.iju-join.jp/chiikiokoshi/

矢崎栄司編「僕ら地域おこし協力隊-未来と社会に夢をもつ-」学芸出版社 2012 年 12 月

雑誌『DePOLA No.42』全国過疎地域自立促進連盟 2012 年 10 月発行

考察

以上の結果から、地域活性化案のヒントとなるいくつかの考察を上げる。

（１）名水や花の沿道、山奥の滝などに見られる豊かな自然環境が魅力である。
　視察へ行き、多くの自然（色とりどりの花や植物、昆虫、星、森など）を見ることができた。それを地域資源と考え、活性化に利用できないだろうか。

（２）昔ながらの木造の家々、のどかな雰囲気が都会から来た若者には新鮮である。
　貝泊集落の中のほとんど携帯電話が通じないエリアである。自然も建物も都内とは全く違った世界が広がるのどかな貝泊集落の風景を皆に知ってもらう機会を得られないか。貝泊集落は都内から数時間で来られるため、自動車があれば日帰りでの訪問も可能である。

（３）地域住民同士のつながりの強さ、近所づきあいの濃密さが魅力である。
　集落の方たち皆が顔と名前が一致する関係を気づいている印象を受けた（日常、お隣同士のお宅への行き来も多い）。お互いが支え合い見守りあいながら生活している様子を伺うことができ、都会とは違った魅力を感じた。

（４）星の森コテージは、外装内装ともに改善が必要な部分がある。
外装が地味で「泊まってみたい」という雰囲気をあまり感じなかったが、泊まってみると檜の香りが心地よくキッチンやお風呂も広かったため利用しやすかった。今のままではもったいない。外装内装ともに工夫を加え、「一度は泊まってみたい田舎のコテージ」にすることはできないだろうか。

（５）緊急時の対応に問題はないか。
地震時のハザードマップの作成がなされていなかったり、救急車を呼ばなければならない場合に 30 分程度かかることなど対応に、不安を感じる部分があった。現状地域の人たちはさほど問題には思っていないようであるが、今後も引き続きヒアリングが必要であると考える。

（６）Ｉターン者受け入れについて課題は多い。
Ｉターン者受け入れに関しては住民の方の間でも多様な意見があり、積極的に呼び込むには改善が必要である。地域住民組織「コイコイ倶楽部」のコアメンバーが考える集落の今後と、集落の高齢者が考える集落の今後には、方向性の違いがあるのではないか。こちらについても今後もヒアリングを重ねていきたい。

貝泊集落に対する地域活性化案

以上のことから考えられる地域活性化案は以下の２点である。

（１）敬老会への参加やイベントの実施

今回、2 回の調査を実施し、もっとじっくり高齢者の方のお話しを伺う必要性を感じた。また、地域の方々も私たちを大変歓迎して下さり、本当に楽しそうにお話しして下さる姿をみて、今回ヒアリング調査を実施したような、地域住民（特に高齢者）の方のお話しをじっくりと聴ける場を次年度も設定することができないか、と考えた。特に、高齢者の多くが毎月楽しみにしている「老人会」に福が一るを含む大学生が積極的に参加し、傾聴ボランティアのような支援ができないだろうか。またその中では、自分たちがイベントを企画し高齢者の方々と一緒に楽しめるものを提案するということも考えられる。これを実施することにより、考察で述べた（1）（2）（3）のような地域資源（魅力）を参加する大学生は十分に感じることができると考える。また、（5）で上げた星の森コテージを「泊まってみたいコテージ」にする具体的な提案も上がってくる可能性もある。

（２）ワークショップの開催

上記のお話しを伺った中で、問題点や課題解決を必要とするものがあれば、ワークショップを開催し、どのように解決すべきかを住民や行政の方も含めたメンバーで考える場を設定できないだろうか、と考えた。考察で述べた（4）（6）については、まだ調査が不十分であり今後もヒアリング調査が必要である。この 2 点について、さらにヒアリング調査をしていく中で改善が必要なのではないかと考えられる場合は、ワークショップを開催することを検討したいと考える。

※平成 26 年 2 月 1 日に実施した、地域づくりオープンカフェでの提案発表時のパワーポイントは、資料 3 を参照のこと。

７．おわりに

夏の視察を終えた段階では、貝泊集落を観光地として、観光プランをたてようという案が出ていた。しかし、観光プランを練っていくうちに、もっと住民の方々に寄り添った考えをもつ必要があるのではないかと感じるようになった。本当に住民の方は、外部の人たちに来てもらいたいと思っているのか、本当に観光地化したいと思っているのか、という問いに対する結果が今回の調査では得られなかったからである。そのため、地域全体の活性化に重きを置くよりも、地域住民の方たちが笑顔になること、喜ぶことはなにか、と考えるようになった。それゆえ、もっと住民の方々、地域の方々の意見や話にまずは耳を傾ける（聴く）ことが大切であると感じ、今回の活性化案に至った。今後は、継続的に地域住民の方々に会い、お話しを聴き交流を深めて行きたいと考えている。

謝辞

調査にご協力いただきました貝泊集落区長の芳賀廣海さん、いわき市役所田人支所（貝泊集落の住民である）助川洋一さんをはじめ、集落の皆様には大変お世話になりました。私たちを温かく迎えサポートしてくださり、本当にありがとうございました。

本事業全体を通して、福島県企画調整部地域振興課の職員のみなさん、引率して下さった清泉女子大学文学部地球市民学科教授の鈴木直喜先生、地球市民学科研究室助手の横山由紀さんには大変お世話になりました。ここに記して、御礼申し上げます。

平成25年度現在貝泊地区の現状

＜資料1＞

貝泊地区面積	39，75㎢
農地面積	1，98㎢

貝泊地区世帯数　　人口

地区	世帯数	人口
貝泊	26	56
戸草	17	39
井出	18	36
合計	61	131

年齢別　性別

区分	1～10	11～20	21～30	31～40	41～50	51～59	60～64	65～69
男	1	1		2	2	18	10	7
女	2		1	2	2	6	6	10
合計	3	1	1	4	4	24	16	17

区分	70～74	75～79	80才以上
男	7	5	13
女	9	12	15
合計	16	17	28

131名の内65以上が78名

震災後避難者　　7世帯　　23名

貝泊地区世帯数年度別

年度	H7	H12	H17	H22	H23
世帯数	82	72	64	71	68
人口	237	186	165	162	154

貝泊小中学校児童数の推移

区分	H3	H7	H12	H14	H15	H16	H22	H25
小学校	24	16	5	1	休校	2	6	1
中学校	8	12	6	4	6	4	5	1

＜資料２＞

～大学生向けのイベント in 貝泊～

・１泊２日
・2014 年 9 月頭くらいに実施か？
・約 12 名ぐらいの募集（＋私たち）→合わせて 20 人程度

＊このイベントの目的
・地域活性化、地域復興
・貝泊を知ってもらう
・元気になってもらう
・本当の避暑地だよ！
・本当のスローライフを味わう

1 日目

マイクロバスを
レンタル？？

8:00～	集合、出発
12:00～	おふくろの宿でお昼ご飯(そばなど)
13:30～	＊2 グループで行動するため 1 つのアクティビティにつき 2h くらいで行動 ・サイクリング→ミッションをしてくる ① 写真をとってくる（地域の人や景色など） ② 人の話を聞く ・シャワーホール→見てから決める（実施できるのか？） ・釣り or 川遊び 小学校を使えるなら使いたい！！（運動会など） 逃走中－Mission－
15:00～	かき氷を食べる→可能？不可能？ 違うものを考えよう！！ すいか割り スイーツほしい
18:00～	バーベキュー、芋煮会

2 人自転車レンタルしたら 4000 円/1 日

泊るところは？
おふくろの宿
一泊二日　￥6,300

夜～	きもだめし 花火 星の観察

2 日目

午前	豆腐作り
お昼	山ぼうしの家でおばあちゃんたちと昼ごはん
14:00	帰る
18:00	到着

－必要経費－

バス	48000～60000 円（18～21 人乗り、運転手の宿泊代・食事代別）
宿泊代	おふくろの宿、6300 円×20 名
豆腐づくり	500 円×20
自転車	一台 4000 円×数台？
花火	数万
すいか	5000 円
下見	-
お昼代	約 1000 円（おふくろの宿）×20 名
（釣り代）	釣り竿×20 本
その他経費	保健、食事、飲み物、機材、印刷など

① 県からの支給
② (10 万円程度)
③ 集落が県から助成？
(30 万～)

平成25年度 集落復興支援事業

清泉女子大学 文学部
地球市民学科
福が一る
浅野汐香 石田絵美 小山田香菜
松田江里菜 牛山結衣 高澤優

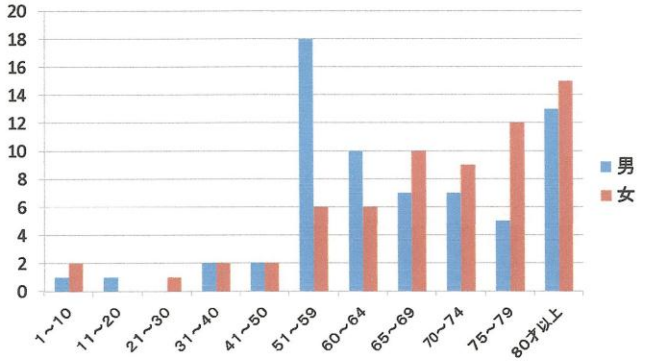
☑ 貝泊地区の概要

貝泊地区面積	39，75㎢
農地面積	1，98㎢

地区	世帯数	人口
貝泊	26	56
戸草	17	39
井出	18	36
合計	61	131

1

☑ 現状　性別・年齢別人口

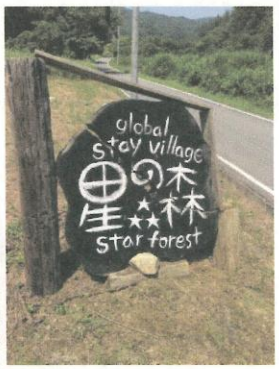


平成25年度

☑ 活動内容①

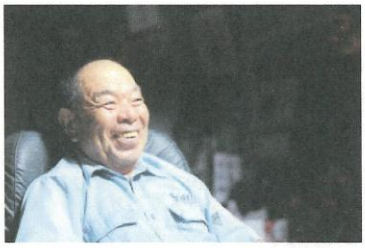
2013年8月29～30日

貝泊地区の視察



2

住民の方々への
ヒアリング調査

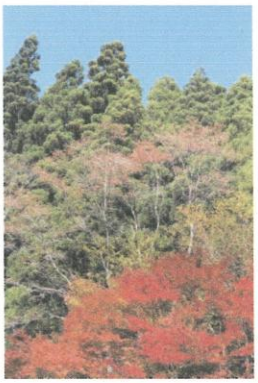


住民の方々
との交流 ☞

☜ 報告・提案

3

☑ 活動内容②



2013年11月17日

おふくろの宿視察
豆腐づくり体験
貝泊地区視察

おふくろの宿 視察

4

☑ 貝泊地区の魅力

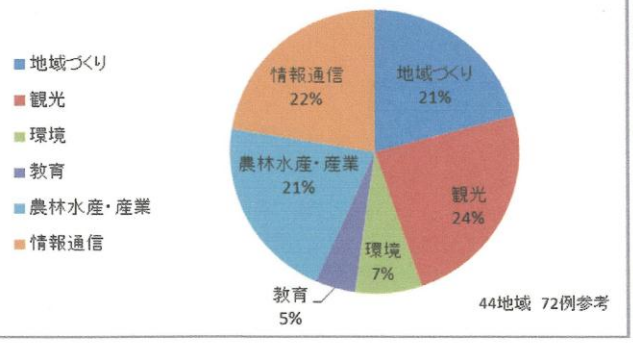
- 名水・花の沿道
- 木造の立派な家々
- のどかな雰囲気
- 地域住民同士のつながりの強さ

5

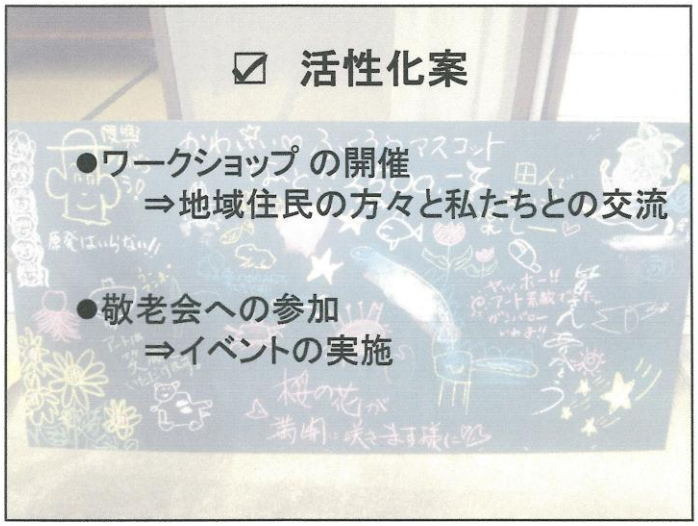
☑ 問題点・課題

- ●若者不足、高齢者増加
- ●Iターン者への環境が整っていない
  ⇒土地を譲らない気持ちが強い
- ●耕作放棄地
- ●ハザードマップが作成されていない
- ●地域の人があまり問題意識を持っていない

地域おこし協力隊事例別　活動内容



6


☑ 活性化案
●ワークショップ の開催
⇒地域住民の方々と私たちとの交流
●敬老会への参加
⇒イベントの実施

ご清聴ありがとうございました

7